



## 農業近代化論

著者	平野 蕃
雑誌名	農業経済研究報告
巻	13
ページ	71-81
発行年	1974-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/33293">http://hdl.handle.net/10097/33293</a>

# 農業近代化論

＊平 野 蕃



次期学部長が決まられたとたんに気がゆるみましたのか病気になってしまい、のどをすっかり痛めましたので、大変お聞き苦しいかと思いますが、しばらくおつきあいいただきたいと思います。と思っています。

私、今日の話の題目を「農業近代化論」というふうにつけておきました。大学卒業の後40数年間近代化のことばかりやっておったというわけではありませんけれども、農業の近代化ということにつきましては、少なからず関心と熱情をそそいだつもりでおります。それで最初に、農業の近代化の内容について私が考えていることを二、三申し上げてみたいと思います。

まず一つは、近代化ということを、伝統的な農法—これは、歴史的、社会的環境の中におかれた農業経営のありかたというように理解されていますが—これが近代的な農法に変わったということで使う場合があります。そして私もそういう使い方をたびたびしてきたわけです。その場合に世界で一番最初に、しかも最もノルマルな形で農法の転換がみられたのはイギリスなわけです。いわゆる三圃式農法というもののから、途中過渡的なレイ・ファーマーミングとかコンバーティブルファーマーミングとかいうものをはさみまして、ノーフォーク四圃輪裁式に代表される輪裁式農法へ移行するということは、農法転換の図式としてすでに皆さまご承知のとおりです。

普通三圃式農法については、圃場を三つにわけて、秋まきの麦と春まきの麦をおのおの作って、一区画だけは休閑するというように理解されております。そういう理解も間違いではありませんが、伝統的な三圃式農法というのは、個人が自由に農耕にたずさわることではなしに、共同体もしくは荘園というものがあまして、こうしたものを通して農耕が営まれるわけですから、個人では作付けの自由もないわけです。それに麦を刈り取った跡には家畜を放牧して、誰でもそこの切り株を得たりしていいとか、あるいはまた耕地が一ヶ所に集中しておらずに分散しているとかいった特徴があるわけですが、なかでも一番重要なことは、地力の再生産のメカニズムというものが、自然草地からの草を家畜の腹を通して圃場に運ぶというしくみになっていたことなんです。

ところが、ご承知のようにレイ・ファーマーミングになりますと、主に赤クローバーなどの牧草を三圃式の休閑地に作るようになり、またスモールエンクロージャーと呼ば

れておりますけれども、それまで共同体に属していた土地を小さく囲い込みまして、そこに自分の好きなように作付けをやるという自由もでてくるわけです。

つぎにそういう段階を経まして輪栽式農法になりますと、まず第一にそれまで分散していた耕地が一カ所に集中され、そこで個人が好きな農業をやるということが原則になってくるんです。作物も、禾本科の作物だけでなしに、主として豆科の牧草それに根菜類などが大体半分ぐらい作付けられるようになって、それが家畜のエサとなり、つぎには堆肥となって圃場に返されるというふうになってきます。いってみれば、地力の再生産のメカニズムというようなものが一つの経営の中で成り立つことによって、地味も肥え、収量もあがり、家畜も肥る、といったきわめてうまい循環した関係がうまれてくるわけです。それにレイ・ファームの段階では、経営の担当者はYeomanry — 独立自営農民と訳されておりますが一であったのが、輪栽式農法になりますとCapitalist farmer といった資本家的農業経営者によって経営が担われるようになる、とまあこういう具合に教科書的には書いてあるわけです。

さてそれで、日本でも農法の近代化ということをやらなくちゃいかんということになって、私の関係しております草地研究施設などでも、本格的にやらねばならぬことだと思っております。その際、北海道の酪農や肉牛、あるいは東北の草地農業というものは、農法の近代化というもののパイロット的な役割りをつとめる地域と考えます。ただし、水田単作地帯の場合ですと、それが輪栽式農法にならないうちは近代化したといえないということになると、話がだいぶおかしくなってくるんです。たしかに輪栽式農法は近代的農法の代表ではありますが、近代的な農法はみな輪栽式農法だということでは決してないわけなんです。

さて、いままで申しましたような近代化の使い方が一つと、それからもう一つは、農業を囲む土地制度、金融制度、家族制度、部落集団、あるいは入会権、小作権などいろいろありますが、そういう制度的なものを近代化するということが、近代化の重要な課題であります。

長くなりますので簡単に申し上げますけれども、たとえば明治維新にできた農地の所有制度が近代的なものか、そうではないのかということで、私の学生時代にはずいぶん偉い先生方で論争が続いたわけです。ところが、私終戦後、あの学生時代の論争は何であったかと思ってもういっぺん勉強しておしましたら、何のことはない、両方とも少しずつ正しくて、両方とも半分間違っていたと、そういう感じがするわけです。

近代的土地所有というのは、所有権の主体がだれになっても、所有権の内容は変わらないということでないといけないわけですが、たとえば、伊達藩時代とか徳川時代ですと、農家の農地に対する関係と、侍あるいは伊達家というようなものの農地に対する関係とはそれぞれ違ひまして、非常に積み重なったいわば重疊的な関係になっていたわけです。そこでは土地を簡単に売買したりすることはできにくかったわけで、近代的な私的所有権

というものは、地租改正の時にはじめて確立することになったのです。

ところが所有権というのは、使用、収益、管理、処分というようにいろんな機能がありますから、農地を人に貸すという場合に貸す人と借りる人の人間関係が近代的かどうかということが大変問題になるわけです。その人間関係が、近代的だという人の意見によりますと、これは民法という近代的法律にもとづいた貸借関係なのだから近代的なものだというわけです。それに対して、そうではないという人は、イギリスの例をいろいろひいて、それとの対比において近代的ではないというふうにいっているんです。たとえばイギリスでは、14世紀から15世紀ぐらいになりますと、借りている人が土地改良をやったりしたときには農地を返すときに残った土地改良の効果を土地所有者が補償してやるとか、あるいはまた非常な凶作のときには減免してもらう権利があったわけです。それから重要なことは、戦前の地主、小作関係というのは、人と人との関係でしたから、たとえば私がAから土地を借りたとしても、AがBに土地を売ってしまった場合には、私とBとの間に貸借関係はないわけですから、Bが返してくれという返さざるを得なかったわけです。そういうふうに、両者の貸借関係が不平等でしかも権利としてもなかったことは明らかですから、地主、小作関係には近代化する部分がいっぱい残っていたということが正しいようです。そしてこの点は、終戦後農地法で改革がなされたのですが、ただ今度は逆にあまりにも近代化されすぎたといいますか、耕作権が非常に強くなってしまって、地主の力が非常に弱くなってしまったわけです。

それからもう一つの近代化の使い方は、経営者能力といいますか、農業経営者の姿勢あるいは考え方といいますか、そういうマネージメント、オペレイトする時の態度というものが、やはり近代的であるのとそうでないのがあるんじゃないかということなんです。こういう使い方はあまりしないわけですが、私は是非使わしてもらいたいと思っています。

これは講義の時にもよくいうわけですが、アメリカの農業経営者と日本の農業経営者をちょっと比較するとすぐわかることなんです。アメリカの普通のファミリーファームの経営者というと必ず一人で、奥さんや子ども達は経営者のファミリーメンバーだという、いってみればfamily farmer and his family membersということになりますけれども、日本では農家の経営者というと何となく家族全体でやるという家族主義的

(宇都宮大学の熊代先生なんかは、家父長的というような表現を使われていますが)な感じがするわけです。

それで、アメリカと日本がどう違うかというと、アメリカの場合には家族が働いてもそれは人を雇ったというふうに類推するというか、擬制的に解釈して費用と考えるわけですが日本の家族経営の場合は、家族の労働は費用には含まれず、所得になるわけです。そうしますとどういうことになるかというと、結局経営の目標が所得になるわけですから、規準

がなくて、いくらでも切り下げられればしんぼうするところまで切り下げられるということになって、本当の目標ではないんじゃないかということになります。それに対してアメリカの場合ですと、経営者個人の利潤と、それに経営者が自分で肉体労働をすれば労働者としての労働に対する賃金という、そういう二つのものが経営の目標ということになって、それが長期に渡って一定の水準以下だったら別の方にいくということも十分ありうるというように、経営者機能というものが近代化されているわけです。それでこの点は終戦後大塚久雄先生が、近代的な人間類型というものをこの際はっきりさせなくちゃいかんというようなことをいって、人間革命だとか、意識革命だとか、あるいは主体性をもてとかいうようなことが一時はやったわけですが、これまで申し上げた経営者機能の近代化というもの、ある意味ではこうしたことにつながる問題なわけです。

以上大体三つぐらいに近代化ということは使われているわけですが、そのうち私の考えでは、何といっても一番近代化が完成したというか、完了したというのは、制度的なことのように思います。もっとも、入会権だとか、水利権だとかいうようなことまで含めれば、まだ慣習法もしくは伝統的なものがあるかもしれませんが、しかし農地制度、家族制度その他というようなものは、非常に近代化しているというふうには私は思っております。

それでは、農法の近代化はどうかといいますと、この近代化は二種類あると思うんです。一つは狭い意味の資本主義化という近代化と、もう一つはそこまで到ってはいないけれどもかといってまた前近代的ではないという意味での近代化ということで、日本の農業経営者というのは、大方私は後者の意味での近代的な農業経営者になりつつあると、こう思うわけです。ただし、狭い意味での資本主義的な農業経営者、Capitalist farmerというようなものには、まだまだほど遠いんじゃないか。畜産部門、果樹部門あるいは稲作部門というようなところで、先駆的にそういうのがずいぶんでてきておりますけれども、それが定着し周囲に相当な影響を及ぼすという域にはないということじゃないか、というような気がするわけです。

さてつぎに、稲作と畜産を例にとりまして、若干近代化ということに関連した問題を申しあげてみたいと思います。

まず、稲作についてですが、稲作は何といっても日本の中核的な作物なわけで、その生産構造については、東北型と近畿型、あるいは東日本と西日本といった二つのタイプに分かれるという話が戦前ずいぶんとあったんです。たとえば、山田勝次郎先生の「米と繭の経済構造」とか、山田盛太郎という人の「日本資本主義分析」だとかいう書物に、そういう東北型、近畿型という話がありまして、これは何かといいますと、土地制度や地主制度がどの程度近代化しているかということで、近代化している方としてない方を色わけしていっておるわけです。

ところがちょうどその頃、全々別の角度から東北の稲作農業を研究していた人が二、三

人おります。名前をあげますと、錦織英夫という私の大学時代の先生ですけれども、その先生は農業地理の方を非常に専攻しておられまして、日本の稲作農業の地域性というようなことを研究しておられたわけです。そしてこの先生の理論は先に申しましたものと非常に違ひまして、私も先生とはまったく別に研究しておりましたところあとでたまたま一致しておったということで心強く思ったわけです。どういうことかと申しますと、日本の農業はどこにいても稲作があるんだから、稲作というのはまあどこも適地で、特定のところが主産地になるということはまずない、という考えが一般的ですけれども、先生の場合はそうではないという理論なんです。たとえば、東京や神奈川をとりますと、たしかに横浜市内などでも水田がいっぱい汽車の窓からみえますが、あれは稲作が収益が高いからというよりむしろ、自給のためとか、あるいは土地の値上りを待つ間あけておくよりも一番やりやすい稲作を、というようなことで作っているわけで、専業農家で収益を上げることなら、稲作よりは野菜とか養豚とかミカンとか、商品生産的な畑作物を必ずやっているに違ひないと思うわけです。ところが、東北、北海道、北陸なんかに行きますと、売のために稲作をやっているという商品生産的（commercial farming というようなことをいいますが）な地帯が非常に多いわけです。詳しいことは省略させていただきますが、そういう稲作というのは農法的にいいますと、主穀式農法というようなことで、これは都市に吸引されるよりも次第に都市から遠ざかる性質の農業だというふうにいわれております。たとえば歴史的にいいますと、明治の30年から40年にかけてすでに稲作がおとろえている地帯というのは、東京、神奈川というようなところ、そして大正から昭和にかけては大阪、兵庫、広島あるいは名古屋近郊とかいうようなところでおとろえ、大雑把に申しますと終戦前までには、ほぼ太平洋ベルト地帯の稲作は、商品生産というよりは自給的なものになっていったわけです。

### 生産県と消費県の分離

生産県における生産率と消費率			消費地における生産率と消費率		
昭和28～32年			昭和28～32年		
	人口率 100とする 生産率	生産率 100とする 人口率		人口率を 100とする 生産率	生産率を 100とする 人口率
滋賀	223.2%	44.8%	東京	2.5%	397.6%
秋田	269.5%	37.1%	神奈川	17.9%	558.9%
富山	212.0%	47.2%	大阪	23.4%	427.0%
山形	257.3%	38.9%	長崎	95.8%	213.0%
佐賀	169.4%	59.0%	京都	56.4%	177.2%
新潟	239.5%	41.8%			

しめたものです。そして、生産率を100とする消費率、消費率を100とする生産率を計算して、ずうっと書いてあるわけです。そこで結局東京で2.5というのは、消費するうちの2.5%しか東京でつくっていないというふう読みとれるわけです。また、生産率を100と

つぎにちょっと表をみていただきたいのですが、ここで生産率といいますが、たとえば滋賀県全体の生産量が日本全国の米の生産量の何%をしめるのかということです。人口率というのは、仮りに人口の割合で消費の割合が近似的にしめされると仮定いたしまして、滋賀県の全人口が日本の全人口の何%かを

する消費率はというと、生産するよりも39倍も多く消費することがしめされております。ですから大体右側に書いたのが消費県、左側に書いたのが生産県だということになるわけです。これを5年おきぐらいに比較してみますと、生産県だったのが消費県になり、そして反対に生産県のうちでも東北六県、北海道なんかで稲の重要性が非常にふえているというようなことがでてくるわけです。

そしてそういう商品生産的な稲作農業というものをつらつらみますと、品種に対する考え方にしろ、あるいは施肥、耕種法、かん排水のやりかたというようなものにしろ非常に優れており、片手間にやっている自給農家なんかはとうてい及ばないということを私結論的に考えたわけです。錦織先生もすでに私が学生のころそういうことをいっておられたわけですから、そこで結局今はやりの言葉でいえば食糧基地というようなところと、稲作は自給部分だけやってそのうちもう消えてなくなるという太平洋ベルト地帯のようなところがあって、そこで近代的な資本主義的な農業経営というものがどういう形ででてくるのか、大変興味のあるところなわけです。

私のところの研究室では酒井君に専門的にやっていただいておりますが、ただ私の説明の仕方と酒井君のそれとはちょっと違っております。まず太平洋ベルト地帯をとりますとあそこはもうメガロポリス的というわけで東西どこへいっても市があるようなところに農村がはさまれていますから、どこにいても職があるというようなことで、皆通勤兼業になっているわけです。ところがやっぱり何となく土地は手離したくない。しかし、老人も、お母さんも、女の人も、もう農業をやりたいがらない。それで誰かやってくれないだろうかということで、リース、信託というようにいわば家政婦さんなんかの派出所みたいなもので、電話一本でさっと飛んできて請負耕作をやってくれるということになっていると思うんです。それが岐阜県の大垣南農協というようなところでは、農協直営の60haだとか20数haとかの、機械化稲作大経営というのがあるわけです。もう数年前ですけども、名古屋で学会があったときにいきましたら、ちょうど秋でスレッシャーといって、巨象とキリンの合いの子みたいな機械が運転されていましたが、まあ私にいわすと稲作というものが消えてなくなる最後の段階でもあるし、これが機械化稲作というようなことになれば、非常に近代的な、資本主義的な（こういってはいいいすぎかもしれませんが）稲作経営だということになると思うんです。

それから東北ですと、岩手県の和賀町だとか、青森県の十和田市だとか、あるいはまた山形県の立川町というようなところでは、農協とか機械化センターとかに大型機械を一式そなえて、耕起から収穫、脱穀にいたるまで農作業の全部をやってやるというようなことがおこなわれております。その場合は何といてもオペレーターが必要ですし、また農協直営でない機械化集団というようなものだと、その中核になる農家はちゃんとした自立経営農家であって、結局中核農家の若い青年達がオペレーターとなって、よその田んぼの請負いをし、規模を拡大していくという、まあ非常に資本主義的な構造をもっているわけ

です、そしてこうした地域では、太平洋ベルト地帯みたいに稲作が消えてなくなる前段階とは思えないので、いったいいまいったような動きが今後稲作中核地帯でどのくらいふえていくだろうかということに、私は興味をもっているわけです。

それからつぎにちょっと、戦前の稲作農家の経営規模がどういう動きかたをしたのか紹介しておきたいと思います。私達学生のころ、agricultural ladder、つまり農業の階梯あるいは梯子<sup>ハシゴ</sup>と申しますか、それがどういうものであるかということを知ったわけで、また私自身も稲作の中核地帯についていろいろ研究したところ、その結果がたまたまいま日本大学の教授をしておられる綿谷という先生の研究と一致しまして、力強く思ったりがっかりしたりしているわけです。それがどういうことかといいますと、戦前はさっきいいましたように地主制度、地主的土地所有というものがありましたが、そこで経営規模が大きくなるのは零細小作農が非常に辛苦して働いて、子供が大きくなって喰いぶちを多く収穫しなければならないときに、5反から1町5反と小作地をだんだんふやして経営規模を拡大していくわけです。そのうちに金をためて、いくらかずつ小作地を買いとって自作地にし、最後に功なり名をとげるころには純然たる3町歩位の自作農に30年位でなるということになります。そうしますと今度は次の代がちょっと身体が弱かったり、農業がいやだったり、後とりがいなかったりして2〜3町ぎりぎり耕作することができないということになると、5反歩、1町歩と土地を貸しつけるうちに次第に貸付け地の方が多くなっていくというようなことになります。結局こういうふうにしまして、自作線、小作線、地主線というものを模式的に引くことができるわけですが、土地を借りたいという人と貸したいという人が大体あるということは、経営規模が大きくなるためには大変よろしいということになるかと思えます。そういう意味で地主制度というのは、小作農がのぼっていく一種の梯子<sup>ハシゴ</sup>の役割をしているといえます。九州の佐賀県の農村では、自作兼小作というのが中核をなしていて、経営規模も大きいというので自小作型前進経営というようなことをいった先生もおります。つまり純然たる自作農というのは何となく停滞的で、地主の候補者みたいなものもある。だから自作農ばかりとか、地主ばかりの村よりも自作兼小作というのが中核になっている村は、非常に生産意欲も旺盛だというふうにいわれているわけです。

ところが戦後、地主、小作関係がほとんどなくなってしまいましたから、戦前の意味でのagricultural ladderというのはとりはずされてしまったわけです。そこでそれに変わるagricultural ladderというのが何であるかといいますと、これが小さい農家や大きい農家が集って大型機械施設を共同で利用することを契機にしてできた、たとえば大垣南農協とか、岩手県和賀町の機械化センターとかなんじゃないかと思うんです。

そこでつぎに畜産のことにちょっとふれたいと思いますが、その場合近頃の日本の資本主義というものをどうしても一言説明せざるをえないと思うんです。というのは、昭和30年頃からですが、畜産物に対する需要というのが非常にふえてきて、これは所得があがると何%需要があがるかという需要の所得弾力性というものを計算するとすぐわかる



わけですが、それでみても需要は非常にふえてきているんです。これについては、どうして急にヨーロッパ的な食生活に傾いたのかという問題もありますけれども、ひとつ重要なことは、所得倍増計画で所得が上ったということがあるわけです。古い資本主義の考え方でいきますと、労働者の所得を上げるということは、賃金がコストである以上好ましくないわけで、なるべく切り下げた方がいいということであつたんです。けれども最近の資本家は、賃金を上げてやればそれが購買力になって我々のものを買ってくれるということで、コストよりも需要要因として重くみるというようなことがどうしてもあるようになります。(労働組合の力が強くなって、労賃の下方硬直性が戦後問題になったことはいうまでもありません)

それからもう一つは、利潤というものの考え方ですけれども、われわれ利潤というと資本家が自由自在に消費生活をする、たとえばデラックスな錦鯉でも飼うんじゃないかというような感じがするわけですが、そうではなくて、設備投資とか技術革新の手段として利潤は一番大事だし、また新しい試みにともなう危険のために留保しておくというようなことに使用されているわけです。それではそういう資本主義はどういう資本主義かということですが、その点については私マサセウセツ工科大学のロストフという教授がいつていること非常に気に入っているんです。高度大衆消費社会、high mass consumption stage。これはどういうことかを簡単にいいますと、高度大衆消費時代になると、まず自家用車、それから電気洗濯機だとか電気冷蔵庫だとかルームクーラーだとか、電気ミシンだとか、一連の家庭生活の仕事を軽減、短縮するような機械がどんどん入ってくる。そういう時代だといわれております。日本は今から10年くらい前にそういう時代になったといっていますけれども、一番最初になったのはアメリカで、1920年代にフォードという自動車会社が大衆車の、mass production をやりだしたときからはじまるといっております。

またそういう社会になりますと、デモンストレーション効果というようなことがあってよその家を買ってもおれの家ではいけないということがなかなか実行しにくくなる。われわれが使いたいと思ったことは一度もなくとも、新しい製品を開発してはそれを買わせる。そして買うだけの購買力を資本主義がわれわれに与えてくれるということになるわけです。

それで、畜産物に対する需要も資本主義からつけていただく、耐久消費財もみんな買えるようにしていただくと、こういうような社会になってきたわけです。そうすると今さら小さな稲作農業を苦勞して資本主義化してどれだけの意味があるのか。小人資本主義、Lilliput capitalism ということで、二、三人くらい人をつかって、一千万円くらいの資本で5haぐらいやるといようなことがもし資本主義<sup>コピト</sup>だったら、それは椅子が三つくらいの床屋さんくらいのものでしかないのじゃないか。ビッグビジネスがわれわれの家庭の中にどんどん入ってきて、われわれの欲望やら趣味を自由に操作するなんていう時代に、小

な Lilliput capitalist を一生懸命育成して意義があるのだろうか。こんな気が私するわけです。

ちょっと飛躍するわけですがけれども、資本家的な農業が世界で最初にできたのは、さっきいいましたようにイギリスにおいてで、17世紀から18世紀にかけての約2世紀位の間に徐々にそうなったというふうにいわれております。まず17世紀ですがけれども、1640年代から1688年ですか、クロムウエルの清教徒革命、Puritan Revolution というのと、Glorious Revolution、名誉革命というものがあまして、その約40年くらいの間に近代的市民社会、Civil society というものが明確になったわけです。その時に、王党派と議会派に分かれて争ったわけですがけれども、政治の主権を議会におけるという要求をした議会派の先頭に立ったのが、独立自営農民のヨーマンリーだったということは、いろんな人からほぼ間違いないといわれております。つまり、30エーカーからその3倍くらいまでのヨーマンリー、それからちょっと上のジェントリーといったような農民層が市民社会を形成したと、教科書的にはいっているわけです。

それで私、その当時の市民社会というのは資本主義社会かという問題ですが、イギリスでは約1世紀おくれた1780年くらいから産業革命と農業革命がほぼ平行しておきて資本主義社会というものができたということで、市民社会の理念と資本主義社会の現実というのは時間的にもずれているわけなんです。それで当然中味も違うわけで、イギリスの市民社会の性格は当時の哲学者ホッブスだとかロックあるいはヒュームに聞けという定説に従って、ロックの「統治論」、 「人間悟性論」をみれば、こういう社会だということになっている。

まず自然状態というのが論理の出発点つまり「はじめに自然状態ありき」というところからはじまって、その自然状態は何かというと、市民社会以前の社会とは何の関係もない、いうならば新しい人間関係というようなものなんです。そこには秩序があって、自然法という法と倫理とががっちり支配しており、その自然法の中に自然権といういうならば日本の新憲法に書いてある基本的人権と同じようなものがあるということなんです。そして、市民社会と個人の間には何の媒介物もない。そういう非常に無力なただ一人の個人が基本的人権というようなものを与えられているから、これはとても個人じゃ守りきれない。ですから今度は社会契約という考え方がでてきて、個体と個体とが自分達の権利を自分達の力で守るルールと秩序を作りましょうということになって、政治社会、政治国家というのできてくるということなんです。その当時、国家に対する考え方というのは、支配階級が被支配階級を支配するものということではないわけです。自分らで作って自分らで守ろう。だからこそ議会に自分らの主権がないと困るんだと、こういう考えなんです。そして裏返せば、個人が義務をいっぱい負っている。みんなが権利をもっているからそれを尊重しなくちゃいかんということで、権利と義務ということを非常に厳しく考えている。そういう個体が集まって市民社会というものを形成していると、こういうことになってい

る。

またそこでは、個体的な利益というものと共同の利益というものはうまくバランスがとれており、どちらかがいき過ぎるとフィードバックするようなことで制御されているということが、各人の主体的な覚悟の中にあるということになっております。

それで、私今まで40年ちかく農業の近代化というのをやっていたのは、こういう社会を構想していたわけで、決して資本主義を農村にもちこむためにやったんじゃないと思うんです。ただし、市民社会というのはなんといっても資本主義の原段階ですから、やがて資本主義にいつてしまうわけなんです。そしてどうなっていくかということについては、私非常にロックが気にいっているんですけどもロックによれば人間というのは神さまと動物の丁度中間くらいで、絶えず上に近づこうと思っているわけなんです。けれどもすぐ下に落ちてしまってエコノミック、アニマルになる。つまり、営利、私的利益というものが自己目的化してしまって、そのためなら何でもやるという社会になってしまうんです。これは無限に頹廃し堕落していく。それで、私はクリスチャンではありませんが、原罪、original sin のようなものが何かあるような気がするんです。ロックによれば、人間というのは非常に弱小で謬りやすいのだから人間の政治的な考え方とか、思想とか、良心というようなものは、決して唯一正しいと思って人に強制してはいけない。自分と違った考え方も十分尊重しないとイケない、というようなことがいろいろありまして、私、市民社会というのは実に次元の高い社会だと思うんです。それが人間の弱さのために地獄へ、奈落の底へ落ちたのが資本主義社会なのかなあと、こう考えているわけです。

しかし、市民社会というのはまだ窒息して死んでしまっていない。というのは、農家のように資本家でない人はいっぱいいますし、それに基本的人権というようなものもまるで空洞化して無意味だということではないからです。本日は時間の関係で詳しくは、申しませんが、資本主義の国家権力というのは階級的な権利であって、支配者階級が被支配者階級を経済的に搾取したり政治的に支配するという、レーニンに代表される国家論があるわけですが、ただエンゲルスの場合は半分くらいはレーニンのようにいっていますが、あとの半分はそうはいってないわけで、そこでは国家は共同的利益のために自分らで作るということになっているんです。しかしこれがレーニンの「国家と革命」になると、エンゲルスがいったあとの半分については、それを知らなかったんじゃないけれどもある都合でいかなかったということになっているんです。

そこで私は、資本主義社会では階級的利害が四つに組んだ相撲みたいになって、そこに共通の利害がないからどちらかを倒すという考え方になることは、実は資本主義の思うつぽに入ったんじゃないかなあという感じがするんです。私は、せっかく市民社会の法と倫理をかけているわけですから、それを自分らの武器にして守ろうじゃないかということまた相手にも守らせてやろうということの方がずっと基本的じゃないかと思うんです。だから、資本主義社会の階級的な利害というのは深刻に対立しているわけですけども、もと

もと共同の利益を基底にして市民社会を構想したのだから、そこへなぜ帰れないかというようなことを考えるんです。

私は農業の近代化というようなことにいろいろ関心をもっていましたけれども、それは必ずしも資本主義化ということではなくて、法と倫理の次元の高い社会というようなものを何とかして築かなくちゃいかんということであったような気がするんです。というのは個性と共同性、個体的利害と共同の利害というのは非常に裏腹の関係になっていますから、たとえば自然状態のもとでは万人のものであった緑の森やきれいな水、あるいは空気や日光とかを特定の人が私的な利害でよごす権利をもっているとは、市民社会の論理からはどうしても思われないわけです。

そういうようなことで、近代的市民社会というものと資本主義社会とは別だと思えます。第一次社会構成を市民社会とすれば資本主義社会は第二次的なものになっているわけです。マックス・ウェーバーは、「資本家的精神」 kapitalistische Geist というのと「資本主義の精神」 Geist des Kapitalismus というのは全々違って、「資本主義の精神」というのはヨーマンがかかげたような法と秩序の次元の高い Geist だというようにいつているんです。私も何かそういう資本家じゃないような生産者というもののあり方を通じて、そしてまた農業を通じて、近代市民社会の方へ少し近づくようなことをやりたいなあと、こう思っているわけです。

大変まとまらない話でしたけれども、ご清聴本当にありがとうございました。

\* \* \* \* \*

本稿は、平野教授退官にあたって昭和48年3月1日に最終講義として行われた講演の要旨をまとめたものである。

平